

瞳を閉じて

雪姫

ダイアリーの日付が九月に変わってから何日かが過ぎた。

分厚い日差しが照りつけていた仙台の街も少しづつ枯葉色に染まり始めている。

とはいえ、体にまとわりつくような生ぬるい風は相変わらずまだ夏のままで、私は家までの道を小走りに歩きながら、着ていたシャツの袖を思い切りまくり上げた。

「ただいま」

「お帰り、麻衣。ごはんは？」

「いい、バイト先で食べてきた」

私は母にそう答えると、リビングには寄らずに階段を駆け上がり、まっすぐ自分の部屋に行った。

そして、汗ばんだシャツを脱ぎ、部屋着代わりのTシャツに着替え、ベッドに腰を下ろした。

とその時。何となく嫌な予感を覚え立ち上がった。

---もしかしたら・・・

慌ててバッグの中をまさぐると、案の定昼間買っておいた毛糸玉がない。

きっとバイト先のロッカーの中に・・・

私は力が抜ける思いがした。

今夜こそセーターの前身頃を一気に編み上げてしまうつもりだったのに。肝心の毛糸を忘れてきてしまうなんて。

この数日間、私が慣れない編み物に必死で取り組んでいる理由は――

高一の時から四年間お付き合いをしている彼に愛情のこもったハンドメイドのセーターをプレゼントするためだ。